

令和7年度 第2回秋田県立博物館協議会議事録

1 日 時 令和8年2月13日(金) 10:00～12:00

2 場 所 秋田県立博物館 大会議室

3 出席者 18名

(1) 委 員

加藤 光誠 委員  
佐々木美香 委員  
三戸 忠洋 委員  
柴田 睦子 委員  
高階 史章 委員(委員長)  
高島 由美 委員  
仲山 智 委員  
本田 由香 委員  
三浦美貴子 委員  
三河 直樹 委員

(2) 生涯学習課

糸田 和樹 生涯学習・学芸振興チーム学芸主事(兼)社会教育主事課

(3) 博物館

阿部 雅彦 館長  
永井 毅 副館長  
新堀 道生 展示・資料チームリーダー  
黒川 陽介 普及・広報チームリーダー  
丸谷 仁美 学習振興チームリーダー  
佐々木朋子 総務チームリーダー

議 事

1 開会

2 館長あいさつ

3 委員長あいさつ

4. 案件

ア 報告

「令和7年度博物館経過報告について」

「令和8年度事業計画について」

展示・資料チーム、普及・広報チーム、学習振興チームから説明

説明についての質疑・応答

(委員)

アンケートについて、利用者の年代や県内・県外の割合はどうなっていますか。

(事務局)

圧倒的に県内が多いですが、夏の「ヨシタケシンスケ展」期間中は県外からの来館も増えました。特別展期間中のアンケート回答者は、県内 798 人、県外 541 人です。年代について、通常は 40 代・50 代の年齢層が多いですが、特別展期間中は子供の回答が半数を占めました。これは通常では見られない傾向でした。

(委員)

セカンドスクールの利用の中で、小学校の利用が減っているということでしたが、どういった理由でバスが出せないのか。

(事務局)

市町村が持っているバスを利用する機会が多いようですが、燃料費高騰もあり、配分が難しくなっているというお話を伺いました。民間バスを借りる予算も厳しいようです。

(委員)

博物館に生徒を連れてくることは校外学習に組み込んでいます。これまで 2 年生を連れてくるが多かったが、バス代がすごく値上がりしている。保護者の金銭的負担が大きくなるように、半分を市の事業を使ってバス代に充てたり、1・2 年生を一緒に連れてきたり工夫している。学校数や生徒数も少なくなっているため、そこも含めて小学校の利用が減っているのではないかと。

(委員)

交通機関がないことで子供たちの学びの場が限られてしまっているというのは全県的、全国的な課題だと思います。

(委員)

出前授業の話もありましたが、やっぱり博物館に来て見たいかなと終います。「バスがあれば行きたい」という学校は多い。スクールバスを持っている学校は、通学に使うのが基本で、年間 100 キロまでという規定があります。隣の学校と乗り合わせるとか、空いているバスを有効活用する工夫ができればいいと思います。

(生涯学習課)

県内の公共施設をどうしていくかという議論が色々始まってきているので、参考させていただきたいと思う。

## (2) 令和 7 年度あきた Museum 機能強化事業

(議長)

令和 7 年度あきた Museum 機能強化事業について、生涯学習課糸田さんより説明願います。

(生涯学習課)

皆様には、今年度も特別展の外部評価にご協力いただきまして、本当にありがとうございます。

した。皆様のご意見をまとめたものをお手元にお配りしております。これを見て分かったのは、それぞれの項目について単に「良かったね」というだけでなく、内部では気づきにくい部分や、外部の視点だからこそ聞けるような、本当に有意義なご意見をたくさんいただいたということです。特に選択式の回答だけでなく、自由記述もたくさんいただき、参考にさせていただきます。こうしたデータの積み重ねもありまして、令和8年度の特別展につきましても、昨年末の議会で予算が通りまして順調に実施できる見込みです。最近では当館だけでなく、県立美術館や近代美術館などでも、非常に好評で入館者が多い特別展が増えており、多くの方が足を運んでいます。県の財政当局や議会の先生方からも力強い応援の声をいただくことも多く、皆様からの外部評価やニーズを反映できているのが大きなポイントだと思います。まずはお礼申し上げます。ご協力ありがとうございました。

## イ 協 議

(議長)

続いて本日の協議事項「賑わいの創出のためにできることは何か」について事務局から説明をお願いします。

(事務局)

本年度の来館者数は久しぶりに10万人を超えまして、昨年度より約4万人増加となりました。ただ、特別展の入場者が5万5000人で、昨年の特展よりも約4万人多いという状況ですので、特別展を除きますと、実は昨年とあまり変わっていないのが現状です。1日の入場者数を見ますと、特別展の時期に最高で1日3,000人を超える日があった一方で、1月・2月に1日30人を下回る日もございます。但し、特別展の時には県外から非常に多くの来館者が来てくれましたし、県内に住んでいるけれど、「ヨシタケシンスケ展があるから初めて博物館に来た」という方もいらっしゃいました。統計は取っておりませんが、外国人のインバウンドの方が例年以上に多く訪れており、非常に今後の可能性を感じる1年だったと思っております。

お手元の資料に新聞の社説が載っており、このように書かれております。「特別展で馴染みのなかった層にアプローチできたのは大きな成果であり、リピーターの拡大につなげてもらいたい。その上で求められるのは、独自の切り口で見せる常設展や企画展の一層の充実だ。展示を通じ、調査研究の成果を広く県民に還元することが県立博物館の大きな使命である」とあります。博物館では今年1年、親しみやすさと話題性、そして専門性を両立させた展示を行ってまいりました。また、博物館教室や出前講座など多岐にわたる教育普及活動、ホームページやSNS等での情報発信も行っていました。施設の老朽化や交通の便の悪さ、予算面など、館にとってのデメリットも多いのですが、その中で賑わいを創出することができればと思っております。本日は「賑わいを創出するためにできることは何か」というテーマで、忌憚のないご意見をお聞かせいただければ幸いです。

(委員)

当社のバスケットボールチームですが、今年度、残念ながら1部に昇格することは叶いませんでした。昨年度、かなり成績が振るわず、人をいかに集めるか悩み、SNSなど色んなことをして今シーズンに臨みました。そして、スポーツ興行は「勝ってこそ」なんだなということが分かりました。勝っていくとお客さんは自然に集まってきます。色々やってきましたが、やはり「勝ち試合」を期待されている。これを博物館に重ねると、我々のようにSNS等で煽るのではなく、やはり「良い展示物」があれば、自然と必然的に人が集まるということなんだと感じました。現在はAIの発展が凄まじく、会社ではコールセンター業務を行っていて、これまでは人が話すサービスを行ってきましたが、今は転換期で人手不足の時代に、いかにAIに頑張ってもらいか、そして人にしかできない仕事に集中するかが重要だと思っています。博物館でも職員が少ないというお話を聞いています。デジタル化やAIにできるところは任せて、人にしかできないサービスや、まだ埋もれている収蔵品の活用など、職員の方が本来やるべき仕事に注力して実践できる環境が必要なのではないでしょうか。

(委員)

先ほど企画展「秋田県博50年のあゆみ」を見て、かつてハチ公が来た時に2万人が来たという話を聞き、そしてヨシタケシンスケ展に5万人来たという話を聞くと、やはり博物館は展示をどれだけ魅力的にするかで人が集まるかどうかが決まるのだろうなという印象を持ちました。ヨシタケ展に関しては、どの年代の心にささる企画だったから人が来たのでしょう。また、秋田ではなかなか見られないものだったから行きたいと思ったのだと思います。観光という意味では、東北ではなかなか見られない展示をどうやって行うかが大事で、滅多に見られないけど誰が見ても面白いという企画を引っ張ってこられるのが大事なのかと思いました。

また、建て替えも含めたりリニューアルを考えていらっしゃると思いますが、ここが不便な場所だからではなくて、ここは魅力がある場所だという風に、街づくりを含めて博物館のあり方を県に訴えかけていくのが正しいのではないのでしょうか。実は天王地区、特に潟上市は流入人口を見ると、県内で唯一増加している市です。駅前の賑わいが失われているのが残念ですが、例えば駅から博物館まで巡回バスを出して、博物館だけではなくて周辺を回る流れができれば良いと思います。特に免許を返納した高齢者が、バスによって博物館に来られるようになればすごく良い。自動運転など新しい技術を活用して、人件費のかからないバスなどが将来実現できればいい。今いる人が博物館に足を向けるということを工夫していくことが大事なのだと思います。

(委員)

今いる人が博物館に足を運ぶためにどうすればいいか考えたのですが、博物館のイベントカレンダーのようなものを小中学校に配付したりしていますか。児童会館では毎月カレンダーを作って配付していて、それを見ればイベントの内容が分かるようになっています。また、スタンプリー的な、ここに来たという証になるものがあると、子供は喜びます。ここは駐車場に関する苦情がないのは、逆に来館者が少ないから平和なのかもしれません。児童会館などは駐

車場がなくて苦情が多いですし、小さい子と走り回る大きい子がぶつかりそうな不安もあります。母親目線で言うと、そうした環境の良さや、外の人に今こういうことをやっているというのが分かるカレンダー的なものがあればいいかと思います。

(委員)

3年生の校外学習で利用させていただきました。3年生は総合的な学習の中で、金足の自慢を紹介する学習を行いまして、博物館を選んで発表していました。内容は子供たちには難しいかもしれませんが、やはり「本物」の魅力や美しさや迫力は子供の心にも響くと感じています。AIとか動画で何でも見れる時代になっていますが、本物に触れることはすごく大事ですので、また来年度も伺いたいと思っています。ヨシタケシンスケ展に関連して、子供連れで見られる企画や展示があると賑わいが出るのではないかなと思います。特に秋田県は子連れで遊びに行ける所が限られている感じがあります。先ほどの企画展を見ていると、小泉瀉公園と連動していたのがコンセプトのようでしたので、その点をアピールできれば、リピーターにつながると思います。どうしても展示室では「静かにしなければならぬ」「触ってはいけない」という制約があります。もっと体を動かせる、走ったり触ったりできる展示やスペースがあれば、活発な子も楽しめるのではないのでしょうか。

(委員)

職場の20～40代の社員に聞くと、秋田県立博物館と聞くと何をイメージするか聞くと、特別展を見てきた者もいる一方で、全く興味がなく「何するの？」という層もいます。そうした層には、展示物以外の仕掛けが必要です。例えば駐車場で何かイベントやキッチンカーを行うことで、今まで興味がなかった人に知ってもらいきっかけになります。また、私はこの建物が複雑で不思議な作りだと思っていますが、職員の方々の「裏側」の仕事にも興味があります。普段見られないバックヤードツアーや、私の会社（鉄道関係）でやっているような、切符切り体験のような体験型コンテンツがあれば面白いと思います。少数でもマニアックな層の心に刺されれば、SNSで勝手に発信してくれて、今まで関心が低かった層にも情報や魅力が伝わる可能性があります。

(委員)

私は50年前に博物館が開館した当時中学生でした。MUSEUMという綴りを覚えた英語の教科書で、週末に博物館を訪れた米国のミドルスクールの生徒達が、新しい気づきや会話を楽しむ日常に憧れを持ったことを記憶しています。協議のテーマは、「賑わいの創出」ですが、開館50周年式典の県知事の祝辞の結びに「県内外からの来館者の一層の増加」という言葉がありました。一方で、前回の協議会では「社会教育施設、生涯学習施設としての博物館においては、人を集めるためのコンテンツづくりは二の次」との説明がありました。これを踏まえ、私なりに「賑わい」を整理してみました。「賑わい」は大勢の人で混雑している光景を連想しますが、静かな空間で心身をリセットとする、いわゆる「博物館浴」の効果が損なわれてしまう状態ではなく、展示やプログラムで自然な交流が生まれることが「賑わい」だと考えます。それには、来館者の増加は

好ましいことで、日常生活で博物館を意識していない方々に足を運んでいただき、博物館の魅力を感じていただく機会をつくる必要があります。「賑わい」は量よりも質が大切だと思います。

ちょうど冬季オリンピックが開催期間中ですが、私が20代の頃、1980年代後半に映画「私をスキーに連れてって」がヒットしました。その題名を引用、オマージュして「私を博物館に連れてって」をコンセプトに、博物館を休日レジャーの選択肢として提案してみてもどうでしょうか。かつてスキー場やドライブスポットが若い世代の行ってみたい場所だったように、「今度の休日は博物館に行ってみようか」と言ってもらえる県博を目指すことです。今の20～30代の若い世代に加え、「私を博物館に連れてって」のフレーズは「私をスキーに連れてって」の映画を知る世代に響き、世代を超えて来館する動機の合言葉になると思います。メジャーリーグの「私を野球に連れてって」と同じイメージです。そのようなイメージ展開を含めて、期待するのは展示やプログラム、ミュージアムトーク、ギャラリートークを充実させて「交流の場」として賑わいをつくることです。子どもから大人まで世代を問わず集える場所、「交流の場」づくりを意識した企画を重ねることが、「賑わい」を創出する方向性と考えます。

#### (委員)

私は東京から秋田に来ましたので県外の者の目線で、そして車を持っていないので公共交通機関を利用しているので、その視点でお話しします。まず、バス停や駅から博物館まで実際に歩くと、道中非常に不安になることがあります。バスで来た時に、追分三叉路付近で降りて博物館をグーグルマップで調べると2kmと出ますが、東京の2kmとは違って大自然の中で「本当にこの道で合っているのか」と不安になります。電車を使った時に追分駅で降りると無人で博物館がここであるのか戸惑います。スイカが使えるのかどうかも迷いますし、タクシーを呼ぶにも前日予約が必要と言われました。道中を楽しめるような仕掛けや、「博物館はこちらです」という安心できる案内看板が絶対に必要です。

展示について好きな場所がありまして「北方教育（綴り方教育）」の展示です。北方教育は秋田特有の教育だったと思います。おそらく戦時中に貧しい中で子供たちが日々思ったことを綴っていた作文だと思います。金足西小の生徒が書かれた文が展示されていますが、残酷だけれども優しい感情が表現されています。こうした「感じる力」を育てる教育を秋田の教育に活かしていかなければいけないと思っています。なぜ北方教育が胸に刺さるのかというと感情を大切に子供たちが書いたものだからです。今の教育はどうしても正解や効率や評価となりがちだが、秋田が昔から大切にしてきたものは、例えば寒さを感じたり空の色を感じたりする「感じる力」だと思う。不登校や発達障害など生きづらさを抱える子供たちの最大の支えとなる力だと思う。秋田の地域文化、例えばなまはげ、方言、郷土料理などたくさんあるが、守っていくことも大切だけれども、それを現代に生かす教育も必要になってくる。博物館がこのような展示をされているのであれば、教育機関と連携して子供たちに「感じる力」を提供する場として関わって欲しいと思います。やはり出前授業よりもここにきて感じるものが非常に大きいと思います。

先ほどの案内表示の件ですが、横手の近代美術館に行った際、たまたまバスで一緒になった東京からの観光客の方がいました。その方は秋田の美術館と博物館を巡る旅をしていたのです

が、バスを降りたものの近代美術館の入口が分からず、結局、道の駅で買い物をして帰ってしまったそうです。「ここが美術館です」という案内がないために目の前まで来たのに帰ってしまう。これは本当にもったいないです。その方は「秋田県立博物館にも行く予定だが、行き方が分からないから諦めて青森に行こうかな」と話していました。国立博物館のように建物が並んでいるわけではないので、「ここを左ですよ」といった案内は絶対に必要です。不安にさせないで欲しいです。

(委員)

佐々木委員の話聞いてアクセスの悪さはすぐには解決できないかもしれませんが、色々な人に来て欲しいということ考えた時に、館に来るまでの道中を不安ではなくてワクワクさせる努力はしていかなければいけないなと思いました。いまの博物館の知的好奇心を満たす取り組みは理解できますが、もっと遊び心といいますか、幅広い世代に訴えたとしたら必要ではないかと思います。いま収蔵している物をどういう切り口で見せていくかという工夫をなされている印象もありますが、例えば奈良家住宅は、司馬遼太郎が「街道をゆく」で通った道ですし、写真家の木村伊兵衛が奈良家の「板塀」という名作の写真を撮った場所でもあります。そういったものが紹介されていなくて何かもったいない気がします。そうした小ネタを貪欲にアピールしてもいいのではないかと思います。司馬遼太郎が「街道をゆく」の執筆のために、ここに来て思索に耽ったということはすごいことだと思いますし、例えばクルーズ船が来た時に角館や男鹿に行く、ここは素通りしている訳ですし、ストーリーを知っていれば、文学ファンや写真ファンは「ここがあの場所か」と楽しみながら歩いて来ることができます。そうした文化的資源を活かしたアピールも有効ではないでしょうか。

(委員)

賑わいの創出のためにできることは何か、2つ提案があります。1つは「博物館内でのスタンプラリー」。年間を通じて開催される企画展に何度も参加すれば特別展が半額になるとか仕掛けとして有効ではないでしょうか。それを申請する時に、ボランティア活動の案内などもできます。もう1つは「博物館クラブを作る」、対象は小学4年生から中学2年生くらいまで、外の子供の居場所作りです。スポーツや文化系の習い事をやっていない子供たちが、少しマニアックなことを深く学べる場を提供することで、未来ある子供たちの知的好奇心を育てられるのではないのでしょうか。

(議長)

委員のお話を聞いて、展示の魅力が大事でここに来て実物に触れるということが大事なことだと思っています。ナウマンゾウの歯が実物だということを知って初めて知ったとか、そのようにアピールの仕方はまだまだあるのかなという感じはしております。大学の仕事の出張で他の町に行った時に、なるべくその博物館に行くようにしていて、そこに行くとその土地のことが知ることができる。外から来る人に対するアピールはすごく大事だと思っています。あと、他の博物館との連携が大事かなと思っていて、先ほどの委員の話だと、動物園、水族

館などと連携したスタンプラリーを行うことで、県内を回遊してもらう仕組みができると良い  
と思います。

(館長あいさつ、閉会)